

「その了簡になれ」



工学博士 梶 島 岳 夫
大阪大学大学院工学研究科 教授

古典落語では3人目の人間国宝となった柳家小三治師の話である。その師匠で、同じく人間国宝であった故五代目柳家小さんは弟子に漸を教えることがほとんどなかったという。「(オレの芸を)盗め」以外は「その了簡になれ」だけが教訓らしき言葉だったそうである。簡単なことではない。昭和45年に姿を消した人形町末廣という寄席で、あるとき、小さんが演じる「長短」を若き小三治が高座の脇から観ていた。短気な男とその正反対の男の他愛もないやりとりの描写である。気の短い方が次第に苛立ってくる見せ場で、小さんの足の指がピクピク動いた。座って演じるので客席からは見えるわけはなく、見せるための演技でもない。小さんは本当に苛立っていたのだ。小三治師は、これを発見した時の衝撃を「うれしさとあきれ返ったのでボーッとしてしまった」と述べている(柳家小三治『落語家論』ちくま文庫)。

研究をしていて最も高揚するのは、望んでいた結果が得られたときでも、投稿論文の掲載が決まったときでもなく、考え続けていたことが腑に落ちた瞬間ではないだろうか。少なくとも筆者はそう思う。しかし隠微な愉しみにとどまっては、公金に頼る研究として申し開きができない。万人を理解させることは不可能であっても、学術の進展に貢献できる成果を公表しなければならない。かつインパクトがあるためには、よくやってくれた、とうれしがらせるだけでなく、そこまでやるか、とあきれ返らせるくらいの要素が必要だ。

名人芸にマニュアルは存在しない。小三治師も、苛立ちを表現するには足の指を動かせと教わったならそれだけで終わってしまっただろうと、その了簡になる方法を

懇切丁寧に指導されなかったことをむしろ感謝している。師匠からの示唆は前述の「盗め」だけであった。どの分野でも、真似ることから修行を始める以外に方法はない。「真似る(まねる)」と「学ぶ(まなぶ, まねぶ)」の語源は同じだそう。ただし、真似るうちに、型として残すべき芯と、独自性を加えてもよい箇所を切り分けなければ真に学んだことにはならない。芯がないまま個性を主張するのを形無しという。型破りとは、型を身につけた者だけに可能なふるまいである。

幸い機械工学には四力学という型がある。メカニカルエンジニアリングは、従来から機械に分類されるものを扱うことが多かったが、本来は力学に立脚した工学を表現する適切な訳語が与えられるべきであった。3月末、筆者の前々任者にあたり、昨年12月に逝去された村田暹先生を追悼する行事を催し、村田門下から産業界代表として三菱重工業の前川篤取締役副社長、学界代表として辻本良信大阪大学名誉教授に講演をしていただいた。質疑応答で、大学の機械工学科では近ごろ流体機械や内燃機関などの科目はカリキュラムから消えつつあり、これらを扱う研究室も激減している現状に対するコメントを求めたところ、異口同音に、四力学を基盤とした体系の習得と展開が肝要であるという趣旨の回答であった。堅固な型のある体系の強みを感じた次第である。学生には、保存則を中核とする四力学という型をしっかり身につければ、将来どのような技術的難題にも機械工学の立場で適応できると確信して学習に取り組んでほしい。

筆者は主として数値シミュレーションによって乱流や多相流の現象を扱うことを専門としている。そのために

は計算方法と物理モデルを選択または作成する必要がある。しばしば、同業者や企業の技術者から最適な方法について相談を受けることがあるが、実はそれを思い悩むことが当方の仕事で、簡単に答えられるものではない。また、万能で普遍的な方法は存在しない。ここでも最も適切な助言は「その了簡になれ」である。流体または流れの中にある物体になりきって、そのふるまいを表現するにふさわしい方法を検討する。考え抜いた結果として

問題が解決され、計算が必要なくなれば、それが最適なシミュレーションではないか。

再び小三治師の表現を拝借するなら「うれしいやら、あきれ返るやら」と評されるような論文や技術を研究仲間や学生諸君とともに残したいものだ。そのためには、型を磨き、対象の了簡になりきる努力がまだ足りないことを自覚せざるを得ない。さらにそのためには、足繁く寄席に通うことも欠かせないようだ。

